

農家住宅の変遷にみる暮らしの変化

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	日野, 勝子 福留, 雅子 高野, 文子
巻/号	70号
掲載ページ	p. 12-16
発行年月	1989年2月

〔シンポジウム報告・2〕

農家住宅の変遷にみる暮らしの変化
『農家のすまいとくらしウオッチング』からの一考察

日野 勝子* 福留 稚子* 高野 文子*

1. はじめに

農村特有の古い人間関係を打破することに始まった生活改善普及事業も、高度経済成長の時代を経て都市的画一化の見直し、多様化への対応へと移っている。住宅改善も台所から個室の改善、新築ブーム、農村の生活環境整備と進められてきた。

農家も、これを援助する側もめまぐるしい昭和30—50年代であった。そして55年の秋、中国四国農政局で管内9県の住居専門技術員（当時は中・四国全県に住居担当者がいた）が生活環境改善対策事業の検討を持ったとき「環境整備も大切だけど原点は住居ではないだろうか」「農村高齢化の急速に進む今、もう一度農家の住居を見直す必要があるのでは」という話題から、副題にある当調査の企画がなされた。

改善という大きなうねりの中で、農家の住居の良さも見失うのではないかという危惧もあった。それなら実際の農家を目でみて、耳で聞いて、つぶさに記録し今後の指導に役立てようということになった。取材にあたって中国四国農家住宅研究会を発足させ、各県で事例調査を実行に移した。

再三機会を把え検討会を開催すると同時に多くの方々の指導や助言をいただいた。また現地の取材では、農家の方々の家族ぐるみのご協力をいただき、ここに感謝の意を示す。なお本稿は、上記の具体的内容の若干の分析・考察と、中国12件、四国11件、計23件の調査収集を通して感じたことの取りまとめを行ったものである。

2. 農家住宅事例調査の目的と内容

中・四国管内9県の調査にあたっての目的及びその内容は以下に示す如くである。

(1) 目的

農業と農家住宅の変遷を知りそのくらしの良さを見直す中で、創意工夫による伝統的なくらし方を発見し、今後の農家の住まいづくりに役立てる

(2) 内容

1) 農業と生活の変遷と住まい方

①農業の変遷と屋敷内の使われ方／②生活のうつりかわりによる間取りと家族のくらし／③台所と婦人労働／④健康と住まい

2) 農業とくらしの伝承、継承

①家族の変化とくらし／②葬儀、結婚、法事、家の建前などの家庭行事と住まいのうつりかわり

3) 住宅改善の経過

①明治、大正、昭和の年代にわたる住宅の改善時期と家族関係／②住宅改善と婦人労働及び家庭内での位置づけ

4) 農家・農村の良さの見直し

①祖先から継承された暮らしの良さを見直す

(3) 方法

1) 事例の条件

①県の特色がみられるもの、自県の地域的バランスを考慮する／②専業農家あるいは専業農家に近い農家／③100年前後経過した住宅／④80歳前後の老人のいる家庭で家の歴史がわかる人がいること／⑤二世世代以上の家族構成／⑥将来性をもった住まいで、今後とも住まい続けること

* (ひの かつこ・広島県、ふくとめ まさこ・高知県、たかの ふみこ・島根県—各専門技術員)

2) 取材する内容

- ①年表—住宅改善の経過、営農の変遷、生活史などについて年表を作成する／②図面—宅地・住宅の変化が分かるように／③写真—全景を含める

3. 調査結果の概要

(1) 暮らしの変化の実態と問題点

住宅形態は時代の流れの中で、それなりに家族状況や、生産環境とのからみの中で変化しているが、それをくらし方、つまり生活の仕方の局面でみると、いくつか特徴的な傾向がみられる。

ここでは、良い面、悪い面の両面からみる。まずはじめに良い面としては、

- ①農業が家の外に出ているということ——現在も農業を行っている専業農家23件、全てに言えることであるが、農作業空間が住宅を出て、住宅は多少の違いはあるが、ほとんどの部分が住生活専用空間となっていること。
- ②目的に合わせた部屋づくりが長い生活の中で確立してきている——住宅内におけるプライバシーが確立され、老夫婦、若夫婦、子供室など、それぞれ独立してきていると同時に公共的空間として台所・居間の確立がみられる。
- ③生活の場の中に台所を中心とした女性の場の整備がなされてきている——農作業と家事を兼務する主婦の労働軽減のため、台所はもちろんのこと、洗濯室、風呂等、家事中心の空間の整備が進んでいる。その反面、男性の場の整備には目立った変化はない。
- ④家族の南下が進んできている——これまで南側はハレの空間であり、ケの空間としての個室は北側の暗く狭い場所が一般的であった。近年、間取りの形態が変化し、増改築で居室といわれる部分を南面させる傾向が顕著にみられる。

一方、変化しているがそれに対応して改善されず、結果として悪い面を残すに至っている点としては、

- ①持ち物、家財道具等が増えているのに、それに見合うだけの収納部分の対応（確保）が意

外となされていない——生活の多様化に伴って、生活資材がどんどん入ってくるにもかかわらず、納戸あるいは押入等の住宅内の収納空間は従前のまま、あるいは若干増える程度で、結果として家の中が雑然としている場合が多い。土蔵等が別棟で建設されている場合でも、その収納場の整理が使用頻度別になされていないため使い勝手が悪い。

- ②住宅内における近隣とのコミュニティの場が減少してきている——農家の場合は10時や3時に一ぶくするという風習のある地域が多い。その場所は土間であったり、縁側部分であったりするが、近年、改造等でアルミサッシが導入されていることでオープンとなる空間が減少している。

(2) 暮らしの変化の動機或は契機

- ①農業形態の変化——ただ中国と四国では気候・風土も異なるので同一には語れないことから、それぞれについてみる。まず中国では、水田を中心として副次的に養蚕からタバコ、乳牛、和牛と営農体系が変化している。一方四国では水田の生産に占める割合が小さく、畑作が中心であり、あとは酪農が入ったり、タバコが入ったり、藍が入ったり、色々な作目が交錯している。その結果、中国では、住宅に接して牛舎があり、四国にはまったくそれが見られない。従って土間、あるいは内庭の使い方の変化も中国と四国では大きな差が見られる。
- ②跡継ぎの結婚——跡継ぎは「イエ」にとって重い存在である、と同時に他人をイエに迎えるための儀礼的傾向でもあった。ただ現在は、そうでもしなければ嫁もこないし、跡継ぎすら出ていく。このような状況が契機となって住宅の建て替えが行われたり、家の模様替えがなされている。
- ③個の確立及び子弟の教育に対する意識の高揚——農業もそれなりの教育がなければこれからは難しい、ということと、一方では将来、子供には農業ではなく別の職業につけさせた、との二面性はあるが、とりあえず勉強部屋を確保している。
- ④高齢化社会の到来——老人の介護のし易さ、

と同時にある程度のプライバシーの確保のために専用の老人室が設けられている。

⑤女性の発言権の拡大——特に家事部門（台所、風呂、洗濯場）などが改善の対象となっている。

(3) 実態調査を通して特に感じたこと

第一に、60-200年の経過の中で、木造住宅の構造が厳然として生き残っていること——今の木造住宅の耐用年数からすると想像できない。これは、住む人のメンテナンスの努力はもちろんのこと、家の風格を保とうとする努力の表れではないか。つまり、一方では負担を感じながらも、己の住宅に自信を持っているということの表れと受けとめられる。図1は、広島県の事例であるが建築年数がおおかた200年ぐらい経過している専業農家の住宅である。また表1は、当農家の生活史の一部を見たものである。この記録を見てもわかるように、昭和になって改善が進み、聞くところによるとこれまで1500万円（ただし、改善当時の金額の合計——現在の金額にすると、2000-3000万円は超えていると思われる）程度の改善のための投資がなされている。つまり、一方では古い家をなんとかしなければならぬと思いつながら、やはり自分の家にプライドをもちながら、また、住みやすさもあって、大事にしているといえる。それには、農業や生活の歴史の重み等との大きな関わりがあるといえる。

第二に、住宅改善は戦後に始まっていることが顕著にみられること——これはわれわれが行ってきた生活改善運動（農村と都市との格差是正のための運動）と、前述した動機および契機との相乗効果があった結果と思われる。と同時に、特に専業農家の場合はそれなりの収入があって、建て替えや改善のための投資が可能であった。つまり今の時代では極めて大変な金額だが、当時はその面では今よりは豊かであったとも言える。

第三に感じたことは、それぞれの農家が、地域の顔を持っているということである。

地域の風土に合った建物、風格を大切にしたいということが、屋根、築地松、土間の使われ方にあらわれている。取材した各県の担当者もそれを膚で感じながら、そこに住む人達から話を聞いたに違いない。

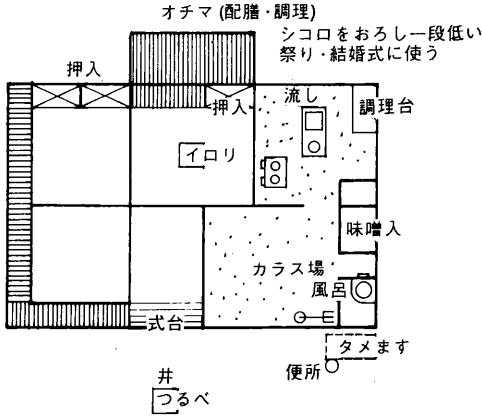
表1 某農家の生活史

項目 時期	住居の変遷	営農の変遷	家族の変遷
明治	松田城主 次郎丸	元 祖 新左衛門 亮和正月 新左衛門 79歳 文化4年3月 妻 きよの 75歳没	
明治 30年	次郎丸より分家、 家号を国丸とする		
明治 40年	上座敷増築 (祖父 弥六)	米作農業	
大正 5年		米作農業 まち倒し (水田拡張工事) 水田 1.5㍓ 畑 2㍓ 山林 5㍓ 和牛 2頭 馬 2頭 (競馬用)	5年 祖母 ヒデ 没 9年 父 秀雄 母 花子 結婚
昭和 元年	隠居所新築 (祖父 弥六)		
昭和 20年	オチ間の戸棚をとり 除く	米作農業 経営規模、前と 同じ	12年 祖父の後妻 没 16年 祖父 弥六 72歳で没 18年 次女結婚
昭和 30年		種牛飼育 牛の種付 (自然交配)	20年 長女結婚
昭和 40年	38年 母屋後側改 造 (19万)	33年 乳牛を導入 酪農経営に はいる 37年 草地造成 50㍓、小型 トラクター 導入	31年 三女結婚 32年 三男結婚 34年 光徳、四男 農業短大卒 35年 四女結婚 36年 父 秀雄没
昭和 50年	42年 母屋前側改 造 (84万) 四方しころ 46年 風呂移転改 造 子供部屋改 造 (40万) 48年 築山整備 (115万) 49年 母屋屋根銅 板かけ (225万)	43年 牛舎建築、 乳牛12頭 光徳一家畜 人工受精師 となり以後 8年間町の 人工受精を する 45年 大型機械共 同購入 47年 牧草地購入 70㍓	40年 光徳、ミヤ コ結婚 長女誕生 42年 次女誕生 44年 長男誕生 45年 長男死亡 46年 三女誕生 47年 長女小学校 入学 48年 長女死亡 49年 次女小学校 入学
昭和 50年	50年 作業場、蔵 とりこわし 納屋新築 (800万) 53年 納屋1階内 装 (37万) 56年 炊事場改善 (125万) 58年 納屋2階内 装 (71万)	54年 公社牧場 乳牛28頭 (茶二役 梅50本切る) 55年 牧場整備 (新農機) 機械 共同利用組合設立 畜産機械 稲作機械 ミニライスセ ンター・育苗 施設	50年 四女誕生 52年 三女小学校 入学 55年 五女誕生 55年 次女中学校 入学 57年 四女小学校 入学 58年 次女高校入 学 59年 三女中学校 入学

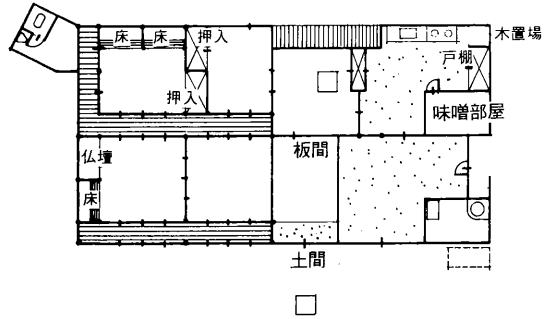
図1 住宅改善の経過
(住宅経過年数120年)

井上家の建設当時の住宅の平面図

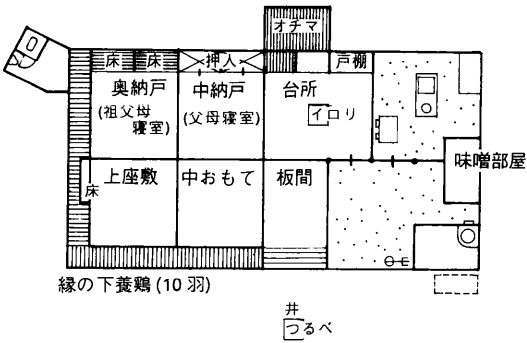
明治以前 箱棟かやぶき屋根



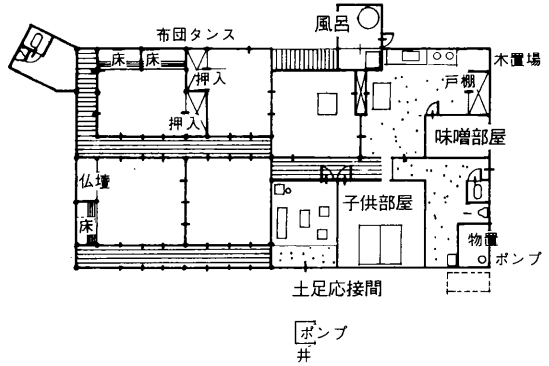
昭和42年 前屋根改造 (四方じころに変える)
仏間移動 (84万円)



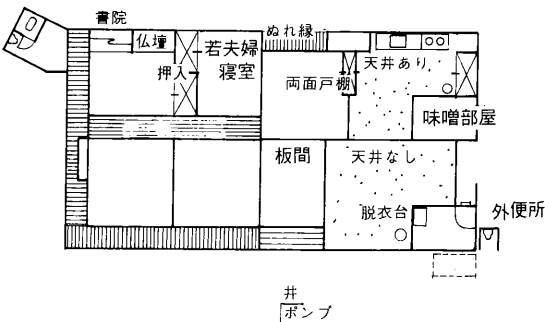
大正 祖父弥六さんの時代に座敷二間をつぎ足す



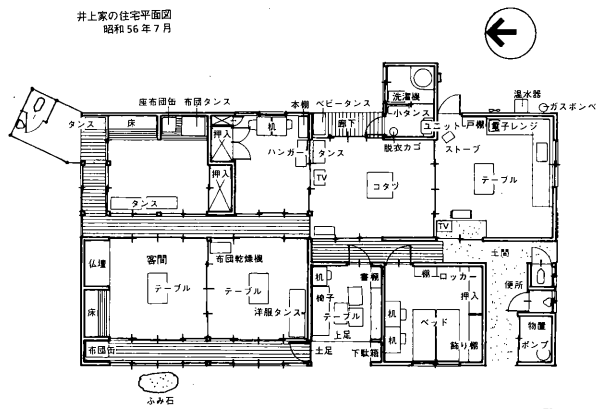
昭和46年9月 子供部屋・玄関の床を低くする (40万円)
風呂の移転 (生活改善資金10万)



昭和38年 後屋根改造 嫁とり準備 (19万円)
台所・炊事場・押入・中廊下をつける



井上家の住宅平面図
昭和56年7月



『農家のすまいとくらしウオッチング』を読んでくださったお一人が「農家という住居にまるで人格でもあるかのように活写されている」と言われた。よい出会いがあったからこそと感謝している。

4. おわりに

住宅の問題を取りあげているうちに、いつのまにか生活環境整備事業が出てきて、それで農家の個々の住宅の空間を取りあげる機会が少なくなった。本当にこれでいいのか、生産の仕方はもちろん、家族構成の変化、さらに、生活の仕方の変化等の中で、生活するための器としての住宅のあり方も変わらざるを得ないのではないか、というような問題意識の中で再び農家住宅の見直しが話題となった。その中で、捨てるべきものは捨て、継承すべきものは継承するという整理が必要なのではないか、ということで本づくりがスタートした。

ただ、どうせやるなら、大学の先生方（民俗学や社会学、及び建築学の先生方）にもできない、普及事業に携わりつぶさに現場の農家を見ているわれわれにしかできないものを掘り下げてつくろうということで話が一致した。その間退職や他の行政に変わった仲間も多い。そして、あっという間に10年間が経過してしまった。荒原稿が出来上がった段階で欲がでて、どうせ出版するなら若干

高くついても、それなりにいうことでこのたびの出版となった。

皆様方の御協力で多くの方に読んで頂き、色々な方の御批判や激励のお言葉を頂いた。特にマスコミヤデザイナー、建築研究者の第一線で活躍されている方々で農家住宅を客観的に見られている方々から「ナウイ」と言っていただき、われわれの方向が決して間違いではなかったことに一安心した。

ただ「古い」と一言で片付けられた人もいらした。それがなんと、農家住宅に住んでいる青年たちであった。確かに、住宅設備等劣っている所は部分的にあるが、圧倒的に農家住宅は有利な面をもつ。広さはもちろんのこと、四季折々の住宅からのながめ、また、自然を取り入れた配置、歴史的永続性の中で営々と培われた構造等々、挙げればきりが無い。そのこと自体を農家住宅に住んでいる人たちが認識していないということ。もっと客観的に自分たちの住まいを見て自信と誇りを持ってほしいと思う。

一方、本を出版したことで二次的に人脈も広がった。特に若い現場の人たちも含めて37名の専技、普及員の御協力をいただき、全員がこの本を通して人脈が広がったといっている。このような二次的な成果も含めて、われわれのねらいはとりあえず達成出来たといえるが、これを機会により一層の努力をしたい。